

A-40) PET によるグリオーマのアミノ酸代謝の検討

亀山 元信・佐藤 清貴 (東北大学)
 蘭藤 順・白根 礼造 (脳研脳神経外科)
 片倉 陸一・吉本 高志 (東北大学サイクロ
 トロンR1センター)
 伊藤 正敏

組織学的に診断された14例のグリオーマ患者に対し、L-methyl-¹¹C-methionine を用いた PET study を行なった。症例は28才から63才、平均42.4才で、Grade IV 4例、Grade III 3例、Grade II 7例である。¹¹C-methionine を 6-25mCi 静注後45~50分のイメージについて、腫瘍部位における differential absorption ratio (DAR) を計算し、組織学的悪性度との対比を検討した。この結果、検討した14例全例において腫瘍部位に一致した¹¹C-methionine の高集積像が認められた。一方、腫瘍部の DAR は Grade IVが 3.13±0.86, Grade III 3.33±1.34 であったのに対し、Grade IIにおいては 1.87±0.40 であり、high grade glioma と low grade glioma の間には推計学的有意差が認められた。¹¹C-methionine による PET study はグリオーマの生物学的悪性度診断に有用であることが示唆された。

A-41) トルコ鞍近傍病変の画像診断
 — Dynamic CT の有用性と
 限界について—

滝上 真良・上出 延治 (札幌医科大学)
 大坊 雅彦・田辺 純嘉 (脳神経外科)
 端 和夫

トルコ鞍近傍には多彩な病変が存在するため、その画像診断に際して難渋することは少なくない。MRI の出現でより多くの解剖学的情報が得られるようになったが、質的診断に関しては未だの感がある。今回私達は、トルコ鞍部病変の診断に dynamic CT を施行し、その有用性と限界について検討したので報告する。対象は過去6年間に dynamic CT を施行した下垂体腺腫68例、髄膜腫4例、動脈瘤3例、肉芽腫2例、下垂体膿瘍2例、頭蓋咽頭腫、ラトケ嚢胞各1例の計81例である。下垂体腺腫の time-density curve は、造影剤の注入に引き続き40~50HU の基礎値から徐々に上昇しプラトーとなる。また動脈瘤、髄膜腫、肉芽腫も特有の time-density curve を示し鑑別診断上有用であった。嚢胞性病変は、flat pattern を描き実質性病変と鑑別可能であるが、ラトケ嚢胞と頭蓋咽頭腫は、組織学的移行型があり time-density curve の検索のみでは鑑別困難な場合がある。

A-42) 症候性 Rathke's cleft cyst と考えられた1症例

清水 俊夫・相馬 正始 (弘前大学)
 姥名 国彦 (脳神経外科)
 渡部 和重 (同
 第一病理)

トルコ鞍部に cystic lesion が発生することは然程多くはないが、Rathke's cleft cyst, arachnoid cyst, neuroepithelial cyst, colloid cyst, craniopharyngioma が主なもので、組織学的所見・内容液などにも移行型、混合型が認められるなど多彩であり、その臨床診断は、時には困難である。最近我々が経験したのは68歳女性、2年前から視野障害を自覚、今回左顔面けいれんを訴えて某医受診し頭部 CT にて偶然鞍上部に cystic tumor を指摘され当科紹介入院となった。神経学的には高度の両耳側半盲、視力低下の増悪傾向に加え、内分泌学的検査では LH-FSH 系の低下を認めた。頭部 CT では鞍内-鞍上部に CSF より高吸収域を示し、輪状に増強効果のみられる最大径 31mm の大きな homogenous な mass lesion を認め、MRI でも cyst 内は CSF よりやや高信号であり石灰化や mural nodule は認められなかった。術中所見では、正常なクモ膜の下にスリガラス様の被膜がみられ、その組織学的所見は一層の円柱上皮と結合織より構成されており、内容液は無色透明で 8 cc が吸引されその性状は蛋白 125mg/dl, 糖 4mg/dl, K 7.1mEq/L で明らかに血清、髄液とは異なり、浸透圧も 298mOsm/L とやや高値を示した。更に電頭による組織学的検索などを行い確定診断を試みた。

A-43) Plurihormonal adenoma 中に
 Rathke's cleft cyst が見られた1例

池田 秀敏・亀山 元信 (東北大学)
 吉本 高志 (脳神経外科)

下垂体腺腫内に大きな Rathke's cleft cyst を見ることは極めて希であり、報告例の大部分が prolactinoma 中に見られたものである。今回われわれは、acromegaly を呈した下垂体腺腫内に Rathke's cleft cyst の形成を認めた症例を経験したので報告する。〈症例〉50歳、男性。13年前より、顔貌の変化、足の増大に気がつく。2年前より、インポテンスとなる。頭部X線撮影で、トルコ鞍は著明に拡大、単純 CT では、鞍内および鞍上部に石灰化を思わせる high density area が認められた。MRI で腫瘍は、鞍内から上方に伸展し、第3脳室を上方に圧迫しているのが認められ、T1WI で high or